

- ▶ 前島 密は、天保6年(1835)1月7日、越後中頸城郡津有村字下池部の豪農上野助右衛門の第2子として生まれました。幼名は房五郎。後に前島家を継ぎます。成人後、来輔と改名しましたが、国は輔の字を禁じたため密と改めました。弘化元年(1844)、高田の倉石窩の門に入り、江戸に出て苦学を続けながら洋医学を学ぶうち西洋の事情に目覚めました。安政5年(1858)から巻 退蔵と名乗り、同年11月、箱館に赴き諸術調所に入門、武田斐三郎に航海学を学び、安政6年(1859)、奉行から預けられた箱館丸に乗り、北海を巡航し、更に転じて南海に出て、摂津・播磨・上総・下総から陸奥を経て南部の宮古に越冬し、翌万延元年(1860)箱館に戻りました。当時、航海術を実地に学べる場所は箱館と長崎より他にはなく、特に武田斐三郎の実用主義教育は、後にわが国の産業、文化に貢献する有為の人材を生むに至りました。門下生には山尾庸三、井上勝、蛇子末次郎、今井兼輔などがおり、前島密もその一人でした。文久3年(1863)、外国奉行組頭向山栄五郎に従って対馬に行き、その後長崎に滞在することとなります。慶応元年(1865)薩摩藩に招かれて開成学校で英学を教え、同3年(1867)江戸に帰り、親戚の幕吏前島錠次郎の家を継ぎました。明治3年(1870)6月、新政府に仕えた密は、租税権正から駅通権正となって駅通事業の改革を考え、イギリスに派遣されました。明治4年(1871)、帰国して駅通頭に任じられて郵便制度を確立します。一方、飛脚屋に勧めて5年陸運元会社(後の内国通運会社)を設立させました。その後内務少輔から大輔に進み、元老院議員を兼ねましたが、その間、地租改正、度量衡改正、商船学校、訓盲院の創立、内国勸業博覧会の開催等新制度の創成に大きな功績を残しました。明治14年(1881)、大隈重信らと共に官を辞して改進黨に入り、翌年海員救済会を作り、明治19年(1886)東京専門学校(現早稲田大学)の校長となり、翌年関西鉄道会社社長に推されて就任しました。明治21年(1888)には逓信次官に任ぜられ、電話事業の創始にも尽力。退官後、明治27年(1894)北越鉄道会社社長となり、難工事の末直江津―新潟間を開通させました。明治37年(1904)、貴族院議員となりました。また密は漢字廃止論の先駆者でもあり、「毎日平仮名新聞」を発行しました。向学心に燃え、国内はもとよりロシア、イギリスと外国に学び、日本の郵便制度を作り上げた前島密は大正8年(1919)4月28日、85年の生涯を終えました。



前島 密 胸像

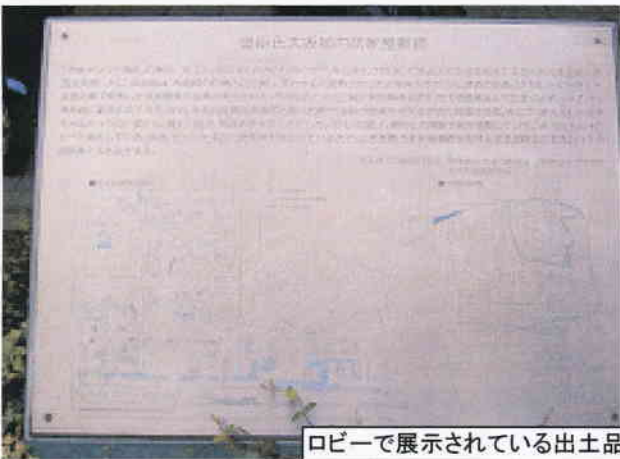


**39 豊臣氏城内武家屋敷跡** 中央区北浜東3-14 大阪府立労働センター(エルおおさか)

▶ 大阪府立労働センター設立の際、発掘調査を行った結果、ここは豊臣期の武家屋敷だったことがわかりました。

説明板には次の内容が記載されています。

「労働センター南館」の建設に先立ち、昭和62年(1987)8月から11月にかけて、桃山時代(16世紀)に築造された豊臣秀吉による大坂城跡の発掘調査を実施した。この地域は、大坂城の惣構内に位置し有力大名の屋敷があったと推測されていた。調査の結果、元和元年(1615)大坂夏の陣で焼失した武家屋敷の遺構が検出された。門の岩石とそれに続く築地塀基部の石垣は規模構造ともすぐれ有力大名の外構施設に足るものである。また、それらは現在の道路と同一方向で、当時の地割を考えるために貴重である。そこで、検出された遺構をバルティコの一部とし、地上に移設、保存活用することにした。(但し、位置は建物との関係で若干移動している)また出土品はロビーで展示している。なお、出土した鬼瓦に桔梗紋が使われているので、この屋敷の主を桔梗紋を家紋とする加藤清正あるいはその関係者と見られる。



ロビーで展示されている出土品(左の写真は桔梗紋の鬼瓦)



加藤清正像(熊本)



加藤清正像(生誕の地愛知県中村区)



# 40 熊野かいどう碑

中央区天満橋京町3

▶ 天満八軒家船着場を起点とする熊野街道についての碑があります。碑文には次の内容が記載されています。

熊野街道は、このあたりを起点にして熊野山に至る道である。京から淀川を船でくだりこの地で上陸、上町台地の西側 脊梁にあたる御祓筋を通行したものと考えられ、平安時代中期から鎌倉時代にかけては「蟻の熊野詣」といわれる情景がつづいた。また、江戸時代には京・大坂間を結ぶ三十石船で八軒家の船宿があったことから「八軒家」の地名が生まれたという。



街道沿いのいたるところに建つ石碑



**<熊野参詣>**  
平安時代中期ごろから、熊野三山が阿弥陀信仰の聖地として信仰を集め、皇族・女院・貴族の参詣が相次ぐようになりました。室町時代以降、皇族・貴族に代わって武士や庶民の参詣が盛んになりました。その様子を「蟻の行列」に例えて「蟻の熊野詣」と言われるほどの賑わいだったそうです。江戸時代には伊勢詣と並び、庶民が数多く詣でました。明治以降は熊野への参拝が減少し、街道は鉄道の発達や近代的道路の整備などによりその道筋や機能を失っていきました。しかし、熊野への信仰は現在でもなくなったわけではありません。



住吉大社付近の「熊野街道」の碑

